# 伏見宮連歌会と源氏寄合

位藤邦生

## はじめに

本稿は、後崇光院を中心とする伏見宮連歌会で、『源氏物語』に基づく付合がどのように行なわれていたか、その実態の一端を見ようとする試みである。応永期堂上連歌の世界で、『源氏物語』がどのように享受されていたかが、考察の主たる課題となろう。心敬に「なりくたり侍る」と評された応永期の連歌だが、現存する作品の量が極端に少ない故もあって、その「なりくたり侍る」姿さえ、いまだ十分に研究が尽されているとはいえない。後崇光院の『看聞日記』紙背に記された連歌作品は、巻四巻末の一枚を除けば、すべて張行時点の原本であって、その意味でも、応永期堂上連歌を知るための貴重な資料である。ここでは、考察にあたって『図書寮叢刊　看聞日記紙背文書・別記』（昭和四〇年養徳社刊）に翻刻された作品を使わせていただいた。

## 一

時代が少々下るが、宗祇は『長六文』の中で次のように言っている。

源氏の物語を寄合につかまつる事、常の事候、但し彼物語を知らざる人は多くつかまつり違ふ事今も侍り、又三句にわたる事をも不知、付行事に侍、如何様なるが三句になるとなれば、松の柱、萱屋、柴などいふ句、須磨とこれを付け、又若木の桜など付事あるべからず、余事これにて分別あるべく候、（岩波文庫『連歌論集下』）

単調・沈滞を嫌い変化を尊ぶ百韻の行様の方面からの要請である。群書類従本『連歌新式』にも、「源氏物語者、大部の物なれば、三句すべし。但同じ所は二句ばかりすべきなり。」とある。そして、このような決まりが特に記されること自体に、当時広く「彼物語を知らざる人」が「源氏寄合」に寄りかかって安易な句作りをしていた事実が知られよう。ここで伏見宮連歌会の作品を見れば、次の如き例がある。

14のこすかゝみや形見なるらん　　基ゝ
15須磨人の世話になる花植て
16若木のさくら春そひさしき　　長ゝ
（賦山何連歌、応永32・3・25）

（※以下作品を例示する場合、無署名のものは後崇光院の作品である。）

『源氏小鏡』（高井家本、以下『小鏡』と略称）によれば、「形見の鏡」は「須磨」の寄合になっている。『光源氏一部連歌寄合付

詞』（古典文庫、以下『光源氏』と略称）には採られていないが、『光源氏一部連歌寄合之事』（第九すま）に、源氏が離京に際して紫上と詠みあった歌をあげて、「かたみのかゞみすまのわかれに付べし」と述べている箇所である。「花植て」が須磨の寄合になることは、今のところ種々の連歌作法書にも見つけ得ないが、

31 植て待花も老　　前ゝ
花さへのこさる木の種なれや

32 浦　　行光
おきよりかすむ須磨のうらさと

（賦片何連歌、応永31・10・26）

19 うき世にも命のをしき花を見て　　長資朝臣
20 若木のさくらたのむいくはる　　宰相
21 うみつらのかすみそめたる須磨の浦　　（善基）
22 （浪）こゝもとに（ちかしきほ時）

（賦唐何連歌、応永30・3・29）

等の例を見ると、前者では「植て待（花）」と「須磨」が付合の契機だと考えられるし、後者では「花植て」と「若木のさくら（↓須磨）」による付合だと判断される。少なくとも伏見宮連歌会の内部では、「花植て」は「須磨」の巻の寄合に準じて了解されていたのであろう。もとより『源氏物語』の本文に光源氏の須磨での流謫の生活を叙して、「時の間に、いと見所ありてしなさせたまふ。水深う遣りなし、植木どもなどして、今はと静まりたまふここち、うつつならず。」とあり、また「須磨には、年かへりて、日長くつれづれなるに、植えし若木の桜ほのかに咲そめて、空のけしきうららかなるに、よろづのことおぼし出でられて、うち泣きたまふをり多かり。」とあるのに拠ろう。『小鏡』では、「庭の草、立石、桜など掘り植えて、時のほどに見どころありて、しなさせ給ふ。」とあり、「庭の草」は寄合の語としてあげられている。さて、先の付合に戻れば、「形見の鏡」⟶「須磨」⟶「若木の桜」の寄合で、同じ巻による三句が続いているわけで、『長六文』で宗祇が指摘したよくない例の典型になる。

96 とふ人まれにすむや柴の戸　　善ゝ
97 須磨のさと都のつてを待わひて　　長ゝ
98 浪こゝもとにちかき満塩　　梵ゝ

（賦何船連歌、応永32・11・25）

『連珠合璧集』（以下『連珠』と略称）には、「柴トアラハ。…すま」とあり、『光源氏』は「須磨」の巻に「しばといふ物」をあげ、『小鏡』も「又、須磨に、柴といふことは……」と説明している。「浪こゝもとに」は、いうまでもなく『光源氏』にあげる「波たゝこゝもとに」の名高い句である。このように『源氏物語』の同じ巻の趣向を三句（又はそれ以上）にわたって付ける例は、伏見宮連歌会の作品では珍しくない。専門の連歌師は参加せず、又有力な指導者をもたなかったアマチュアばかりの連歌会では、仕方のないところであったろうが、わざわざ承賢や蜷川周防（梵灯庵弟子）らの合点を乞うた百韻でも、こうした三句つづきの付合が平気で行なわれている。

59 都には夢こそかよへ須磨のさと　　三ゝ
60 すきし三とせをいまになさはや
61 へ植て待若木の枝に花をみて　　長ゝ

（賦何船連歌、応永25・10・25）

右の例では承賢は61の句に付墨している。一般に応永期の連歌では、『源氏物語』の同じ巻による三句つづきの付合も、そう神経質に咎めるべき欠点ではなかったのであろう。もっとも、右の例の場合、60は明石の巻による付合で、『連珠』『光源氏』には見えず、『小鏡』に「この浦には、三月より次の年の八月までおはしまし、須磨、明石の二浦に、三年住ませ給ふなり。三年の別れとは、これなり。」と述べるところに拠った付合であろう。とすると、「須磨」——→「三年」——→「植をきし若木」は二つの巻を行きつ戻りつの付合となる。見せ消ちの句形修訂は誰の手によるものか。原懐紙を見なければわからないが、長資の句は修訂によって語調が整い、「程なく」が効いて付合が緊密になっている。

## 二

次に伏見宮連歌会の作品の中から、『源氏物語』によるその他の付合の例を拾い出しておきたい。ただし、当該連歌会の付合の実際に用いられた『源氏物語』の巻々には、巻によってその使われ方に相当に大きい片寄りがあって、いくつかの巻々に集中している。この事実は、連衆の『源氏物語』についての知識、或いは特定の巻々への愛着等に関係があるらしいので、あらかじめ注意しておきたい。（「須磨」「明石」および「松風」の巻々による付合の考察には、特殊な問題をも含むので、別稿を用意した。）

「桐壺」の巻に基づく付合は見当らない。「帚木」の巻による付合は、どういうわけかいつも「夕顔」の巻と入り組んで用いられているので、次に例をあげて検討してみたい。

89夕かほの花はちきりのしるへにて　長ゝ
90たそかれ時そ心かるゝ　慶ゝ
91晴よかし雨夜の月のうすくもり　行ゝ
92鳴ふくろふの声もすさまし
93秋は猶なにかし寺の物ふりて　重有
94よそに木（魂）そよへはこたふる　長ゝ

（賦何物連歌、応永32・9・17）

89 90は「夕顔」の巻による付合。「夕顔（の花）」と「たそかれ（とき）」の寄合は『小鏡』『連珠』その他があげていて説明の要もあるまい。90 91は『小鏡』（帚木）にあげる「雨夜の物語」からの付合と思うが、『連珠』にも「たそかれ↕雨夜」の付合は出ていない。巻の連想による付合であろうか。91 92は「雨夜」と「ふくろふ」の寄合である。『連珠』に「あま夜とアラハ。…梟」とあるが、『小鏡』『光源氏』にはあげられていない。なお「ふくろふ」は「夕顔」の巻に「気色ある鳥の枯声に鳴きたるも、梟はこれにやと覚ゆ」とある箇所から、『光源氏』で「夕顔」の巻の寄合のことばとなっている。そこで、92を「夕顔」の巻の場面とみなし、93は「夕顔」の巻から「なにがし寺」を取り出して付けたのである。もっともこの「なにがし寺」の語は、『小鏡』の本文には「なにかしの院」としては出てくるものの、寄合のことばとして記されていず、その他の作法書にも見えない。単に『源氏物語』の地の詞「なにがしの院」から少々形をかえてとったとみるか、当時の伏見宮連歌会では「なにかし寺」が「夕顔」の巻の寄合のことばだとみなされていたのか、そこのところははっきりとしない。93 94は「ふくろふ↕木魂」で、「夕顔」の巻による付合であろう。ただし「木魂」の語は「夕顔」の巻の寄合のことばとしてはどの本にも採りあげられて

いない。『小鏡』の文章にもないので、某院での怪異に触れて『源氏物語』の本文が、「手を叩きたまへば、山彦の答ふる声いとうとまし。」とか、「我人を起こさむ、手叩けば山彦の答ふる、いとうるさし」とか言ったところの「山彦」を、それに近い言い方「こたま」に置きかえたものであろうか。『源氏大概真秘抄』には同じ箇所を、「源氏これ光めせとも、山彦こたへて、呼手をうては、手をうちなとする也。」としており、この方が、「よへはこたふる」の表現に一歩近い。『連珠』には「山ひことアラハ。…こたふる。声。ひゝく。なにかしの院。（源。）夕顔。（同。）」とあり、「木玉とアラハ。（山ひこ同物也。）きつね。（源。）鬼。（同。）…」などとある。「ふくろふ」→「なにかし寺」→「木魂」も、これらの語をミックスした拡大解釈の一種だと考えることができるかも知れない。

ここで以上にあげた六句の付合の様相をまとめておけば、いずれも「夕顔」の巻の趣向を踏まえた句作りであるが、句の移りに、寄合の語に安易にもたれた変化の無さが指摘できよう。86 90は浪漫的な恋の気分をうまく盛りあげているが、91で変化のつきかかった句展開を、92 93 94では、景気の句に転じたとはいいながら、「夕顔」の巻のことばにひきずられて、また長々とひきのばしている。この辺りが伏見宮連歌会の実力の限界であった。

もっと極端な例がある。

62 心つくしそ秋のならはし　長ゝ
63 すま人はたよりの文を待つるに　重ゝ
64 いせの（か）よひの「　」（を）さよ　正永
65 みぬ方の事をもきくは物語　長ゝ
66 雨夜はことにすこきあかつき　重ゝ
67 山住の梟なきてさひしきに　重ゝ
68 なにかし寺の名こそふりぬれ
69 夕顔のやともかりなる契にて
70 たそかれ時そ人はまたるゝ　正永
71 空目かとみるよりやかて恋しきに　長ゝ
72 ひをりの車
　しのひ車の主そゆかしき

（賦唐何連歌、応永31・正・25）

『源氏物語』による付合のオン・パレードといった趣である。説明はできるだけ簡単にとどめよう。62 63は「心つくし↔すま」の寄合（『光源氏』ほか）。63 64は、伊勢の六条御息所からの文使いを踏まえて、「須磨↔伊勢（のつかひ）」（『光源氏』ほか）の付合であろうが、64の句に限れば、（虫損の部分の語句がわからないにしても）「伊勢のかよひ」には『伊勢物語』狩の使いの面影も浮かぼう。そこで65はむしろ「伊勢↔物語」として話題を『源氏物語』から他へ移そうと図った句作りであったとみたい。ところが66では「物語」と「雨夜」の付合（『連珠』『小鏡』ほか）で、またもや『源氏物語』に逆戻りする。67の「梟」は、先述のとおり「あま夜」に対する寄合のことばであり（『連珠』）、同時に「夕顔」の巻での寄合の語でもある（『光源氏』）。66 67の付合が『源氏物語』を踏まえているとは限らずしも言えないが、68ではその方向で前句を解釈して「夕顔」の巻の趣向で付けた。69 70 71については説明も要るまい。三句とも、「光ありと見し夕顔の上露はたそかれ時の空目なりけり」の歌に基づいた付合である。71 72の付合には興味が

ある。元の形の「しのひ車」ならば、乳人の家を訪ねた光源氏と夕顔との出合いの趣向がひき続くが、「ひをりの車」となると、当然『伊勢物語』第九十九段が連想されよう。

むかし、右近の馬場のひをりの日、むかひにたてたりけるくるまに、女のかほの、したすだれより、ほのかに見えければ、中将なりけるをとこの、よみてやりける、

みずもあらずみもせぬひとのこひしくはあやなくけふやながめくらさん

返し、

しるしらぬなにかあやなくわきていはんおもひのみこそしるべなりけれ

のちは、たれとしりにけり。

『伊勢物語』を踏まえてこそ、前句との付合が生きてくる。「ひをりの車」への改作は重要であった。ついでながら、つづく73の句は「玉章をうとき中にはやりかねて」となっている。以上の句の各々の付合の工夫はここに詳述しないが、68 69の句は、

91へ夕顔のやとかりそめの契にて　　重

92なにかし寺の「　」

（賦何路連歌、応永27・5・25）

また、65 66については、

72しらさりし昔をきくや物語　　長〻

73品さたまれる人の家々　　綾〻

74宿直する雲居の庭の雪のあと

（賦何船連歌、応永28・2・25）

と、ほかにも同工異曲の句作りが見られ、ここにも伏見宮連歌会のマナリズムがあらわれている。「夕顔のやと」と「なにがし寺」の付合が「夕顔」の巻から、「物語」と「品さたまれる」と「宿直する雲居」それぞれの付合が、「帚木」の巻からの構想であることは、明らかであろう。

## 三

「賢木」の巻については、次のような例がある。

70やゝさむしとや　　行光

はやいつしかによはる虫のね

71へ野宮の別の秋のうき暮に　　綾

72そのかたみとやのこるさしくし

（賭何人連歌、応永27・壬正・13）

70 71の付合『連珠』では「野宮とアラハ。…虫のね。」としてあげ、『小鏡』も「賢木」の巻の寄合のことばとして「虫の声」を採り、「これらは、野の宮、伊勢などに付くべし。」と説いている。72の付合は『光源氏』にあげる寄合の語「別のくし」に拠っていようか。「さしくし」は『小鏡』『連珠』には見えないが、その箇所は『源氏物語』本文に次のように出ている。

斉宮は十四にぞなりたまひける。いとうつくしうおはするさまを、うるはしうしたてまつりたまへるぞ、いとゆゆしきまで見えたまふを、帝、御心動きて、別れの櫛たてまつりたまふほど、いとあはれにて、しほたれさせたまひぬ。

81野の宮のわかれの小櫛かたみかや　　前〻

82伊勢路にかよふ程の遠さよ　　長〻

（賦山何連歌、応永・32・後6・25）

この場合の「わかれの小櫛」も同様である。「伊勢路」の付合は『小鏡』にいう「いかにも旅の空、物憂き飽かぬ別れの心ねを、伊

勢の事に寄せて付くべし。」との説に忠実に沿った付合である。ほかに「野宮」と「榊」の寄合には

52伊勢路のわかれしたふ野ゝ宮　　重有
53さし榊はあかぬ名残の形見にて　　長ゝ

54豊の明かりのおしき舞姫

（賦山何連歌、応永31・3・18）

等があり、『連珠』には「榊とアラバ。…別。（野宮。）」とある。「小榊」「さし榊」はそのヴァリエーションといえよう。なお53 54の付合は、のちに『新撰菟玖波集』（一二七三番）に入集した。

「賢木」の巻による付合は、私の見るところ、右にあげたもののほか五例がある。ここで句の引用は全部省略して、寄合のことばだけを示せば、「野宮→黒木の鳥井」（『小鏡』『連珠』）「伊勢路・野宮→玉墻→榊」（『光源氏』『小鏡』、三句連続）「野ゝ宮→伊勢・すゝか（こえ）」（『光源氏』『小鏡』『連珠』）「野ゝ宮・玉櫛→伊勢」（『小鏡』『連珠』）「松虫→野宮→黒木の鳥井」（『光源氏』『小鏡』『連珠』、三句連続）「むしの音・野宮→さし榊」（『小鏡』『連珠』）となる。前句全体の趣向をとりなして『源氏物語』に結びつけるといった巧緻な付合は見られず、すべて源氏寄合に寄りかかった付合である点に、改めて注意しておきたい。

## 四

「野分」の巻に関しては、次の一例がある。

48露も花なる萩のむらさき　　行光
49野分して心をくたくうき暮に　　御ゝ
50おもひそめてはわすられぬ君　　重

（賦何人連歌、応永31・2・25）

『光源氏』には「野分」の巻の寄合の語として「野分」「むらさきのうへ」をあげる。48 49の付合は「萩のむらさき」から「紫上」を連想して付けたものであろう。ただなこの付合が全体として前句にかっちりと対応しているとはいえない。49 50の付合は、『小鏡』に「野分」の巻の「風さわぎ村雲まよふ夕べには忘る間もなき忘られぬ君」の歌をあげ、「野分といふことあらば、この歌のことばをも、とり添ふべし。」と言っているのにそのまま沿った源氏寄合である。とすれば、雲井雁への夕霧の慕情がその内容となる。なお右の歌、『源氏物語』の本文では、「風さわぎむら雲まよふ夕べにもわするゝ間なくわすられぬ君」となっている。

「若菜（上）」による付合には次の三例がある。

35このくれのことさらおしき鞠遊ひ　　前ゝ
54御すのひまよりみゆるかほはせ　　重有
55かしわ木や恋のうき名を残らん

（賦何目連歌、応永32・2・29）

『小鏡』は右の付合の背景となるべき箇所を次のように叙している。

女三の宮を、柏木の衛門の督、見たてまつりて、思ひかけたることは、若菜上の巻に、春の末つ方、六条院にて、かすめる暮れ方の庭にて、御鞠あり。衛門の督も、参り給ふに、宮の飼はせ給ふ猫を、いづくよりか、知らぬ猫追ひて、らうがはしく御簾の内へ入りて騒げば、宮、立ち給へり。猫の綱にて、御簾のあき

て、宮の御姿見え給ふ。その折より病となり、あさましかりしことなり。

『光源氏』には「若菜（上）」の巻の寄合のことばとして「鞠」をあげている。更に53 54の付合の場合は、『連珠』にあげる「鞠とアラハ。…みすのすきかけ。（源。若菜。）」に拠っていよう。「柏木」は『小鏡』に「柏木」の巻の寄合の語として出ているが、この場合の付合は「若菜（上）」の巻の鞠遊びの場面を踏まえたとみる方が自然ではあるまいか。『連珠』には「柏木とアラハ。…恋しぬる。（同。（筆者注、源）衛門督事。）として源氏寄合が採られている。

65あふにけにかつはとしのふ名の立て　前
66みたれこゝろになるやかしは木　重
67鞠数の名残になりて暮日に
（賦山何連歌、応永32・12・6）

65は『源氏物語』と直接には関係がない。66はその恋の句を柏木と女三の宮との恋愛にとりなして付けた。一応巧みな句作りといえよう。67は先にあげた「若菜（上）」の巻の鞠遊びの場面を連想しての付合である。ただし先の例で見たように、「かしは木」と「鞠」とは同じ巻に基づく寄合のことばとしては諸書に採りあげられていない。柏木の語が「若菜」の巻の話題として了解され、伏見宮連歌会の会衆は、その辺にあまり神経質でなかったのであろう。

同じ柏木の恋を扱った句作りのうち、次の例は少々趣がかわっている。

65よそに名のたつをもしらすしたはれて　善
66広薬に風の高柏木　御ゝ
67つなきゑぬ猫の引縄みしかきに　正永
（賦何人連歌、応永31・2・25）

66は前句の内容から女三の宮に対する柏木の慕情を想定したが、柏木を樹木の名として扱い、前句の恋を景気の句へとつづけたものである。ところが、67は前句の「柏木」から「猫」（『光源氏』）「猫の綱引く」（『小鏡』）と、源氏寄合をそのまま利用して付けた。その結果66 67の付合は、ことばとしての寄合はとっているものの、意味の通じにくい付合となってしまった。

## 五

宇治十帖にはいって、「橋姫」の巻による付合には、次の二例がある。

28風ふきすきぬ跡の村雨　正永
29引手ゆへ比巴の撥音品有て　行光
30きくもふりぬる名こそうはそく　重ゝ
31都路につゝけは何か宇治の里　稜ゝ
（賦何人連歌、応永27・壬正・13）

『連珠』には「村雨とアラハ。…ひわ。」とある。但し源氏寄合に限るまい。『光源氏』（「橋姫」の巻）によれば、「ひわ」「うはそく」「宇治」は、それぞれ源氏寄合のことばとしてあげられている。29 30の付合は、宇治を訪ねた薫が八の宮の姫君たちが弾く琵琶（と箏と琴）の音を聴く「橋姫」の巻の場面を想起して、付けたものであろう。『小鏡』はこの場面を「ひきすさびたる撥音、絶え絶えに聞こゆ。」と書いている。ただし29 30の付合では、八の宮が弾く琵琶といことになってしまう。

79行得ては道に迷はじ　　梵丶
80うはそくの独も宇治の雪をみて

81撥音高く
けに撥音のさゆる四の絃　　長丶

（賦何路連歌、応永32・10・15）

『小鏡』に八宮を説明して、「いとうつくしき姫君二人もちたてまつり給ふが、見捨てがたくおぼして、俗ながら行なはせ給ふ。」と述べているが、80は、79の行者の姿から宇治の優婆塞を想い起こしての付合であろう。『小鏡』は「橋姫」の巻の寄合として「四の緒・撥」をあげている。

ところで、伏見宮連歌会の作品に『源氏物語』による付合をする場合、宇治十帖に関しては、物語の筋が一人一人の会衆にどの程度理解されていたか、大いに疑問である。先に見た「夕顔」「賢木」「若菜（上）」等の巻々では、少なくとも『源氏物語』のそれぞれの場面のストーリーを踏まえての付合であった。ところが宇治十帖に関しては、そうした話の筋が全然顧慮されていない、右に見た二例にしても、「八の宮という人物が「優婆塞ながら」宇治に隠棲して、琵琶などの諸道に堪能であった。」ということさえ知れば、寄合の語を用いて一応の句作りはできるので、『源氏物語』の話の筋は殆んど関与していない。更に次の例になれば、『源氏物語』は全然関係ないことになる。

60宇治の川瀬をくたす柴船　　長丶
61橋姫のそのなや月にしたふらん　　行豊
62かたしく袖は露のかりふしひとりね　　慶

（賦何人連歌、応永20・11・21）

すなわち、『新古今和歌集』寂蓮の歌「くれてゆく春のみなとはしらねども霞におつる宇治の柴船」や、『古今和歌集』読人知らずの歌「さむしろに衣かたしき今宵もや吾を待つらむ宇治の橋姫」などを踏まえての句作りである。歌枕としての宇治が、句作り、さらには、付合の中心になっていて、源氏寄合とはいえない。同じ例は他に五例を数える。

41人とはて冬はさひしき小野丶奥　　重丶
42いさやよるへも浪のうき船　　（野）
43へ行えなとしらぬ契となりぬらん

（賦片何連歌、応永26・9・25）

「小野」はもともと歌枕であって、多くの歌に詠まれている。『源氏物語』では、柏木の未亡人落葉宮がかくれ住んだ場所として「夕霧」の巻その他に出、『光源氏』には「夕霧」の巻の寄合のことばとして採られている。さらに宇治十帖では、横川僧都が住んでいたところ、浮船が隠れ棲んだ場所として出て来、「手習」の巻の寄合である。41 42の付合は、「小野」と「うき舟」による付合で、「手習」の巻によろう。ただし「うき舟」の語は『光源氏』（「手習」の巻）には採られていない。42 43は浮舟の不安定な恋愛から入水・出家に至った経緯を踏まえての付合であろう。これも一応「手習」の巻の構想に基づく句作りである。

64ちきりを（秋）の宇治（の橋）姫　　長
65あくかるゝ身を浮船の月の暮　　重
66ゆくえしられぬ恋ははかなし　　賢

（賦何木連歌、応永32・12・11）

『光源氏』には「宇治」「うきふね」を寄合のことばとしてあげている。「あくかるゝ」は「浮舟」の巻の末に、右近の言葉として、「かくのみ、物を思ほせば、物思ふ人のたましひは、あくがるなるものなれば、…」云々とあるのによるかも知れない。65 66は先にあげた場合と同趣の付合で、巻名は特定できないが、浮舟と薫の恋による構想である。

65（通）なれ道はまよはす宇治の雪　重ゝ
66名もうき舟そ浪の上なる
67埋木の行衛もしらすなかれ来て　長ゝ
（賦山何連歌、応永22・閏6・25）

右の例の場合、ことばの上では「宇治」と「うき舟」が「浮舟」の巻の寄合である（『光源氏』）が、二句間の付合の機微ははっきりと表現されていない。66 67になれば『源氏物語』と結びつけない方がよいであろう。

次の三例になるとさらに面妖なことになる。

51（跡）みするしのひ通のう宇治の雪　御ゝ
52（こ）とにこき入浪の浮舟　梵ゝ
52手習は庭の訓の程なるに　綾ゝ
（賦何人連歌、応永31・2・25）

51 52は『小鏡』によって「宇治」「浮舟」の寄合がわかる。52 53は「浮舟」「手習」の付合であろうが、『光源氏』にも『小鏡』にも「手習」の巻の寄合のことばとしてはあげられていない。もっとも『小鏡』には「浮舟、小野の尼に連れられて小野に住みけり。あらぬ世に生まれたる心地して、誰に、わが身のことをも故郷のことをも言ふべきなれば、つくづくと手習をして、硯に向かひて、思ふことを歌によみしなり。この巻より手習の君と心得べし。」と述べられており、やはり「浮舟」「手習」と、『源氏物語』の巻名に基づいた付合といえよう。そして、二句の内容は物語の筋にはまったく関係がないといってよい。

29もろともに人も分けり宇治の雪　野
30よるへはいつく浪のうき舟　重有
31手習はまたいとけなき比そかし
（賦何路連歌、応永30・4・4）

73袖の雪宇治の橋姫かたしきて　重有
74手夕ならふ床のさむき夜すから　行ゝ
（賦何人連歌、応永29・3・28）

前者はすでにあげた「宇治の橋姫」の歌に拠っていようが、ここではそれとともに「手習」の巻の名をどうにかして入れようと苦心しているように感じられる。（但し、前者の31は、「手習」の語を使って、しかも内容は「若紫」の巻、尼上を失った幼い紫上が手習をする場面を想起させる工夫かも知れない。）

これで「須磨」「明石」（及び「松風」）の巻以外の巻々による源氏寄合の検討をおわる。源氏寄合に基づく付合の例で、ほかに見落しているものもあろうかと思うが、今のところ右の事例を見い出したのである。以上に見たように、宇治七帖を踏まえた付合は、これまでに見た他の巻々による付合とは趣を異にし、多くの場合、言

ってみれば支離滅裂、他の巻々による付合と同様源氏寄合にもたれているが、宇治七帖に関してはそれさえも十分に使いこなせていない有様であった。伏見宮連歌会では『源氏物語』に基づく付合が多く行なわれたが、それは特定の巻々に集中していて、その点に特色がある。そこには会衆の知識の深浅が深く関与していようが、彼らの好みの問題もあったろうと思われる。

—広島大学文学部講師—